

かわさき区の宝物シート

宝物No.
22-2

つるみせん 鶴見線

エリア	田島地区	シーズン	通年
	全域	日時	

目的	<input checked="" type="checkbox"/> 観る	<input type="checkbox"/> 遊ぶ・体験する
	<input type="checkbox"/> 食べる	<input type="checkbox"/> その他

宝物定義	<input checked="" type="checkbox"/> ものづくり	<input type="checkbox"/> イベント・祭り
	<input type="checkbox"/> 味づくり	<input type="checkbox"/> にぎわい
	<input type="checkbox"/> 現代の文化的なもの	<input checked="" type="checkbox"/> 港めぐり
	<input type="checkbox"/> 歴史的なもの	<input checked="" type="checkbox"/> 人物



渡し船と扇島海水浴場の風景(昭和13年)
写真提供：倉形泰造氏



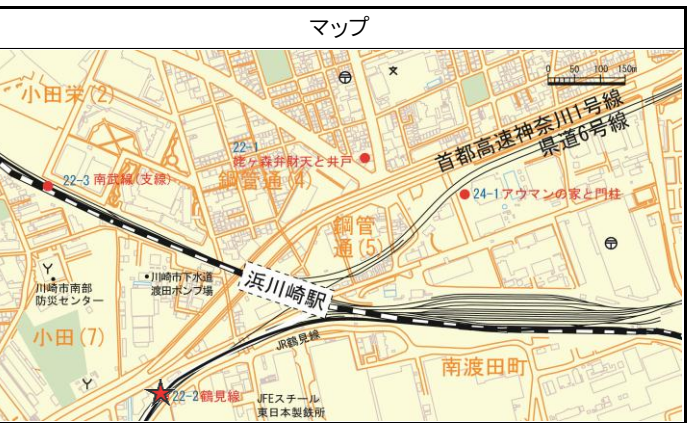
海水浴前駅と発着場があった竹の下付近の現在



旧車両クモハ12系(平成8年武蔵白石駅)



所在地	横浜市鶴見区(鶴見駅)~川崎市扇町(扇町駅)・川崎市大川町(大川駅)
問い合わせ	
TEL	
FAX	
E-mail	
URL	
交通	JR浜川崎駅または鶴見駅で乗換



基礎情報

■路線総延長9.7km、鶴見～扇町(本線・7.0km)、浅野～海芝浦(海芝浦支線・1.7km)、武蔵白石～大川(大川支線・1.0km)の3路線からなる。武蔵白石から東の本線と大川支線が川崎市に位置する。もともと臨海埋立地の輸送機関として浅野総一郎によって敷設された路線であり、旅客営業を行っていない貨物線や沿線各工場への専用線が無数に分岐していた。

■昭和2年(1927)、浜川崎操車場・弁天橋間、武蔵白石・大川間で貨物専用鉄道として「鶴見臨港鉄道」が開業した。昭和5年(1930)には「海岸電気軌道」を合併し、昭和9年(1934)に鶴見と扇町間が開通したことによって横浜方面と川崎市臨海部との連絡が図られた。その後は、臨海部への工場の新設・拡充の進行と同時に、輸送体系の整備も進められていった。第二次大戦期には沿線に軍事施設がつけられ、軍事上重要な路線として昭和18年(1943)に国有鉄道化された。昭和62年(1987)JR東日本に移行し現在に至る。

由来・エピソード

■鶴見線の駅名のほとんどは、当時の実業家の名前等にちなんで命名されている。「鶴見小野」は地元大地主の小野重行、「浅野」は浅野財閥の創設者で鶴見臨港鉄道を設立した浅野総一郎、「安善」は安田財閥の安田善次郎、「武蔵白石」は日本鋼管の白石元次郎、「大川」は製紙王の大川平三郎、「扇町」は浅野家の家紋の扇にちなんでいる。

■鶴見臨港鉄道に先立って、京浜電鉄の関連会社として大正14年(1925)に発足したのが海岸電気軌道であった。臨港地区の工場へ通勤客を運ぶ目的で川崎大師と鶴見の総持寺を結んだ。大正14年(1925)6月に総持寺～富士電気前開通、同年8月浅野セメント前～大師開通、10月には富士電気前～浅野セメント前が開通して全線が開通した。そして浜川崎から路線を延ばしていた鶴見臨港鉄道が、昭和5年(1930)3月に海岸電気軌道を合併した。同年10月に鶴見臨港鉄道が旅客営業を始めると平行する2線は競合路線となり、また軌道線が路面を走っていた産業道路の拡張がきっかけとなって昭和12年(1937)12月、海岸電気軌道は廃止された。

■京浜運河の開削によって浚渫した土砂を投棄していた場所が次第に砂州となり海水浴場へと発展した。昭和初期のことである。現在の扇島(日清製粉の沖合あたり)は“遠浅・近い・きれい”という三拍子そろった「扇島海水浴場」として、ひと夏に20万人もの多くの人出でにぎわい、春には潮干狩も行われた。現在の田辺新田、竹の下踏切あたりには昭和6年(1931)8月に夏季限定の鶴見臨港鉄道「海水浴前」駅が開業し、ここから扇島まで動力船に曳航される渡し船が海水浴客を運んでいた。

補足・その他

関連シート

- (10-1)京急発祥の地碑(川崎大師駅)
- (22-3)南武線(支線)
- (23-4)田辺新田